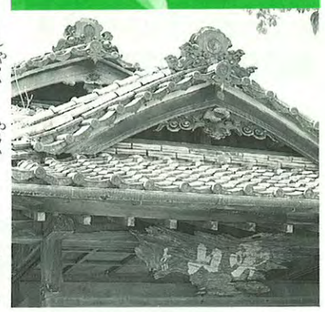
咲けば芍薬。夢、大輪。



熊本市沼山津

弥富 秀次郎さん（86才）
孝 一さん（55才）
道 男さん（19才）

道男さん

五月の風が、さわやかに新緑の木立を渡る頃、肥後芍薬は一年の長い眠りから覚め、一重大輪の花を開く。キンポウゲ科、多年草。肥後六花のひとつ。

つややかな花弁、あざやかな色彩。そして、その芳香に魅せられて、長年芍薬を守り育ててこられた方々がいる。熊本市沼山津の弥富さんご一家だ。

二千坪にも及ぶ広いお屋敷の中には、春夏秋冬、さまざまな花が咲き誇っている。なかでも、芍薬の見事さは格別だ。

弥富家に芍薬が植えられたのは大正三年頃という。戦時中、土地があればカボチャなど食べ物を植えるのに必死で、花どころではなかった時代でも、大事に守り育てられた。

芍薬は、育てることの難しい花である。幾度となく枯れ果てそうになったことがあったという。その度に、「この花は世の中に一つしかない品種。枯らしてしまうと、もう二度と地上に生まれてこないのだ。」という使命感が、重くのしかかってきたという。

肥後芍薬の保存会である白蝶会の村山豪さんらに教えていただいて、床土を替え、排水を良くし、肥料を工夫した。しかも植替えの時、芍薬の根は金物を嫌う。従ってスコップや鍬が使えない。先の尖った樫の棒で用心深く根を痛めないように堀り起こして植替える。

「花が好きで、根気がないとまずできませんね。」

と、孝一さん。

現在この庭には、十七種の芍薬がある。細心の注意を払っているのは、品種を書いた名札をなくさないようにすることである。植替えの時に万一札を落してしまうと、よほどの専門家でない限り、品種を判別することができない。営々と続いてきた花の血脈が、そこで止絶えることにもなりかねない。

孝一さん

もともと肥後芍薬を初めとする肥後六花は、細川藩の藩政振興のひとつとして、改良に改良を重ねてできた花だ。現在で言うバイオテクノロジーの先駆となる花である。それだけに、一本一本に歴史があるわけだ。守り育ててきた人たちの努力の証しが、大輪の花となる。

「病気や害虫にやられていないか、毎日見守っていかなければならないし、家族の協力がなければ、とても続きませんね。幸いに子どもたちも手伝ってくれますし、たぶんこれからも毎年、花を咲かせてくれるでしょう。」

初夏の朝日を受けると、花壇はいっせいに目覚める。そして、夕べには、その大輪の花を閉じて眠りにつく。白・桃・赤・紅・緋・紫、多彩な色が、この一時期に沸くように咲く。

花の中心に鮮黄色の雄しべが盛り上がり、それが、この花の艶となる。肥後六花すべてに通じる凜とした風格は、そのまま熊本の気質だと思う。

考えてみれば、一年の中で、わずか7日くらいである。芍薬が、花として地上に姿を現わすのは。ただそれだけのために、幾人もの人たちが、この花を育ててきた。

「開花時期には、近所の方はもちろん、遠方からも大勢見に来られましてね。それが励みにもなる。よし、来年はもっときれいな花を咲かせるぞという気になるんです。この花は子孫に伝えていく、我が家の魂なんです。」

咲く花よりもなお、それを育てる人たちの心を美しいと思う。

秀次郎さん